

北九州市立大学
文学部紀要

第82号

— 目 次 —

上代語にみるヤによる係り結びの異型

堀 尾 香代子 ……………17

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2013

上代語にみるヤによる係り結びの異型

堀尾香代子

キーワード：ヤによる係り結び，係り結びの異型，特殊な結び，係りの重複，係助詞ヤ，
間投助詞ヤ

1 はじめに

一般に係助詞ヤは意味上これを受ける文末の活用語を連体形で結ぶ形を常態とし、万葉集においてもこのような例が係助詞ヤ全体の93%ほどに上ることから、奈良時代には既に「ヤ—連体形」による係り結びが確立していたことがわかる。一方、集中にはこのような常態によらない句型が7%余り存在し、これらの中には纏った用例数をもつ特徴的な句型も存在する。

上代における助詞ヤは、一般に係助詞・終助詞・間投助詞の三種に分けられるが、これらが元来同一のものであることはしばしば指摘がなされてきた。例えば、野村（2001）には「係助詞のヤは、間投助詞・終助詞のヤから発達したものではないかと思う。」とあり、佐伯（1958）では、「「ヤ」にも、間投助詞でなく、係助詞に属するものがあるが、これも元来別なものではなく、間投助詞がもとで変わって行ったものだろうと考えられる。」とある。また、山口（1990）は「疑問表現には、…古代語の疑問の係助詞「ヤ」のように、本来詠嘆を主とする形式（間投助詞）であったものが疑問形式としても用いられるようになったと推定されるものがあつたりする」（12頁）と述べ、『古語大辞典』（1983年、中田祝夫他編、小学館）は、「「ヤ」の柔らかない疑問はその根底に間投助詞「ヤ」との関連を思わせる。」（「ヤ」の項、此島正年執筆）と両助詞の質的な近似性にも言及している。係助詞ヤを間投助詞ヤから展開したものと見る点で、諸家の見方は概ね一致していると見てよいようである。中古に至るとヤによる係り結びは、「ヤ—連体形」の常態にほぼ限定されることから¹、常態から外れた句型は上代に特有のものであるとともに、ヤが間投助詞から係助詞へと展開していく過渡的な姿を留めている可能性が想定される。

本稿は、常態から外れた句型とその周辺に位置する常態の諸例の観察を通して、間投助詞ヤから係助詞ヤへの展開過程の様相の一端について考究したい²。

2 ヤによる係り結びの異型

どのような句型をヤによる係り結びの異型と見做すかは、係り結びの定義によって異なってくるが、本稿ではひとまず、ヤが文中に位置して係りとなり、意味上これを受ける文末の活用語を連体

形で結ぶ句型をヤによる係り結びの常態とし、これから外れる句型を最も広くヤによる係り結びの異型と見做すこととする³。この基準によれば、上代のヤによる係り結びの異型には次の2種のタイプが認められる。

- a 特殊な結び
- b 係りの重複

以下、この2種のタイプについて具体的に観察していく。

2-1 特殊な結び

文末を連体形以外の形態で結ぶことが確かな係助詞ヤは12例観察される。〈特殊な結び〉をもつこれらの例には、(A)「～ヤ～体言」、(B)「～ヤ～終止形」、(C)「～ヤ～助詞」の3種の句型が見える。

2-1-1 (A) 「～ヤ～体言」

次は体言を結びにもつA型の例である。

- (1) ほととぎす来鳴きとよもす橘の花散る庭を見む人^ヤ八誰 (巻10、1968番)
- (2) あらたまの年の経行けば率ふと夜渡る我を問ふ人^ヤ哉誰 (巻10、2140番)
- (3) 紫は灰さすものそ 海石榴市の八十の衢に逢へる児^ヤ哉誰 (巻12、3101番)
- (4) ひさかたの雨の降る日を我が門に蓑笠着ずて来る人^ヤ哉誰 (巻12、3125番)
- (5) あしひきの山に行きけむ山人の心も知らず山人^ヤ夜誰 (巻20、4294番、舍人親王)
- (6) ここにして家^ヤ八方いづち 白雲のたなびく山を越えて来にけり (巻3、287番、石上麻呂)
- (7) ここにありて筑紫也^ヤいづち 白雲のたなびく山の方にしあるらし (巻4、574番、大伴旅人)
- (8) ここにありて春日也^ヤいづち 雨つつみ出でて行かねば恋ひつつそ居る (巻8、1570番、藤原八束)
- (9) この蟹^ヤ夜 何^ヤ處の蟹 百傳ふ 角鹿の蟹 横去らふ 何處に至る… (古事記歌謡、42番)

これらは一般に疑問詞疑問文(いわゆる要説明疑問)に疑問の係助詞ヤが用いられた例とされる⁴。一首全体は普通「～は誰であるのか」「～はどこであるのか」のように係り結び構文として口訳されるが、これは一首が明確な疑問文であることに加え、ヤの承ける体言句と下接の疑問詞の間に「主一述」の如き文法関係を想定し得ることによると思われる。しかし、このような句型においては、本来的に疑問文であることの標識は述部の疑問詞が担っており、ヤは疑問文たることを決定付ける必要不可欠な要素ではない。むしろこのようなヤは、意味的にも構造的にも、「人名詞+ヤ」の形態をとる次のような間投助詞の諸例との近接性が顕著である。

- (10) 我妹子^ヤ哉我を忘らすな 石上袖布留川の絶えむと思へや (巻12、3013番)

(11) 檀越^ヤ也然もな言ひそ 里長が課役徴らば汝も泣かむ (巻 16、3847 番、法師)

(12) 大殿の このもほとりの 雪な踏みそね しばしばも 降らぬ雪そ 山のみ に 降りし雪
そ ゆめ寄るな 人哉^ヤ な踏みそね 雪は (巻 19、4227 番、三形沙弥)

上のヤは一般に「呼び掛け」と言われるものである。ヤを含む成分(「人名詞+ヤ」)は文法的に主文から比較的独立した関係に立つことから独立語とも称される。しかし、このような「呼び掛け」表現については、例えば佐久間(1959)が、「次に来る命令の語句と相待って、一つのまとまりを形づくるような場合には、その独立性は徹底的なものではあり得ない。むしろ次の語句に対して一つの先導的な役割をつとめる模様が容易に看取されよう。」と説くように、後続する主文(禁止文)との間に一定の意味的關係性を保持しており、両者は完全な断裂を見せるわけではない。このような例において禁止文であることは下文の「～な～(そ)」が決定しており、ヤはやはり文の種類を決定付ける要素ではない。文法的には主文から遊離した関係に立ちつつも、潜在的に「人名詞+ヤ」が主文の動作主体である点で、両構文は構造的に類似している。即ち、(1)～(5)は「人名詞+ヤ」に疑問文が後続する「人名詞+ヤ、疑問文」、(10)～(12)は「人名詞+ヤ」に禁止文が後続する「人名詞+ヤ、禁止文」と把握される。『日本語文法大辞典』(2001年、山口明穂・秋本守英編、明治書院)が「本来的には「や」が文内容の真偽を問うという意味での疑問の係助詞であるかどうか、疑問である。」(「や」の項、野村剛史執筆)と述べるように、間投助詞に由来すると目されるヤは、元来疑問点を指示する機能や一文を疑問文化する機能は備えておらず、その点で「本質的には事態を不明として疑う助詞⁵⁾」であるカとは性格を異にする。間投助詞はその根底に「話し手から聞き手への表現の持ちかけという性質⁶⁾」をもち、とりわけ対他性の強い禁止文ではそのような機能が前面に出やすい。(10)～(12)のヤが「呼び掛け」表現と言われる所以である。一方、疑問文は元来禁止文ほど強い対他性を持たないため、「呼び掛け」としての側面は裏面に退くが、例えば(1)「見るのはおそらくあなたであろう、の意」(全集)の頭注や、(3)「今逢っているあなたは誰」(全集)などの口訳からも窺えるように、「人名詞+ヤ、疑問文」のヤには、上接する人物(聞き手)へ不明な事柄を持ち掛けるような氣息も看守される。ヤが地名・場所・生物を承ける(6)～(9)も、地名・場所・生物などを擬人化し、これに持ち掛けつつ詠嘆するような氣息を帯びるものと解される。ヤは間投助詞の中でも、同じヤ行に属する間投助詞「よ」のように「もつぱら相手に向かう⁷⁾」助詞でなく、「半分自分に、半分相手に聞かせるていの、軽い語感⁸⁾」をもつ。間投助詞ヤのこのような性質が、疑問詞との共起により詠嘆性を帯びた柔らかな問い掛け表現の形成を可能にしていると考えられるが、(1)～(9)の諸例は、元来疑問の意をもたないヤが疑問文へと入り込む先駆的な諸例と考えられる。

ヤは疑問詞を直上に取らず、疑問詞はヤの下にくるという事実は、疑問点に対する指示機能を表すカとの相違を把握する上で極めて重要な構文的事実である。しかし、「疑問詞+カ」が係助詞カ

の40%ほどを占めるのに対し、「ヤ+疑問詞」は係助詞ヤの約4%と僅少であり、かつその全例が(1)～(8)のような〈特殊な結び〉、乃至は後述する〈係りの重複〉といった異型である点は特筆される。このような事実を照らすならば、ヤの下に疑問詞が位置することを、「疑問詞+カ」と同等の構文意義をもつものと見做し、ヤによる係り結びの特質を表徴する事象と捉えることは必ずしも適切でない。疑問詞を伴う係り結びはあくまでもカ領域であり、ヤによる係り結びは原則疑問詞疑問文をとらないと見るべきであろう。むしろ、疑問詞疑問文に用いられるヤは、間投助詞との連続性が極めて濃厚であり、未だ間投助詞的性格を色濃く残す諸例と解するのが穏当であるように思われる。

2-1-2 (B) 「～ヤ～終止形」

次は終止形を結びにもつB型の例である。

- (13) 我は毛也 安見兎得たり(多利) 皆人の 得かてにすといふ 安見兎得たり(巻2、95番、藤原鎌足)

B型は、助詞「も」との複合形「もや」による上の1例が見えるのみである。「もや」は『古語大辞典』(小学館、「もや」の項)に「《終助詞「も」+間投助詞「や」。熟合した間投助詞とする説もある》上代の用法。」とあるように、上代では一般に間投助詞(乃至は終助詞+間投助詞)とされる⁹。(13)も係り結びの異型というよりは、主題と述部の間に間投助詞ヤが介入した句型と見做すべきであろうが、このような複合形「もや」は、中古にかけて常態の係り結び文へと展開し、疑問文の一種と化していく¹⁰。このような例が見える一方で、上代では「主―述」の文法関係に助詞ヤが介入する常態の係り結びが既に一般化しており、ヤによる係り結びの主要な構文の一つとなっている。

係助詞ヤは種々の構文に用いられるが、各構文における分布状況は均一ではなく、特定の構文への著しい偏りを見せる。最も多くの使用例を数えるのは「連用修飾語+ヤ―連体形」の63例(ヤによる常態の係り結びの約27%)で、「条件句+ヤ―連体形」の47例(約20%)、「主語(主題)+ヤ―連体形」の43例(約18%)がこれに次ぐ。これら3種の構文が占める割合は、ヤによる常態の係り結び全体の65%ほどに上り、他の構文の使用数・使用率を圧倒的に凌ぐ。うち「条件句+係助詞―連体形」にはカにも67例(疑問詞を伴わないカによる常態の係り結びの約28%)と相当数の使用例・使用率が見えるが、「連用修飾語+係助詞―連体形」「主語+係助詞―連体形」の2構文は、カの使用例・使用率がヤの使用例・使用率の半数程度に留まる¹¹。未だカが優勢な上代にあって、ヤがカの使用数・使用率を大きく上回るこれら2種の構文は、ヤが本来的に位置する場所(ヤによる係り結びの出発点となる場所)であった可能性が高く、間投助詞との連絡過程が残存しやすい環境と推察される。

(14) 石上布留の神杉神びにし我^ヤ八さらさら恋にあひにける (家留) (巻10、1927番)

(15) 天地に少し至らぬますらをと思ひし我^ヤ耶男心もなき (無寸) (巻12、2875番)

(16) ^{そのこ}士也^ヤ母空しくあるべき (応有) 万代に語り継ぐべき名は立てずして (巻6、978番、山上憶良)

(17) 剣大刀身に佩き添ふるますらを也^ヤ恋といふものを忍びかねてむ (武) (巻11、2635番)

(14)～(17)は「主語+ヤ一連体形」のうち一人称代名詞「我」、乃至一人称としての普通名詞「士」^{そのこ}「ますらを」(以下、一人称主語と呼ぶ)に助詞ヤが下接する例である。集中には一人称主語を承けるこのようなヤは28例ほど観察されるが、これは主語を承けるヤの65%余り(43例中28例)に上る。これは同主語に下接する係助詞カが12%(25例中3例)しか見られないのに比し著しく高い使用率で¹²、「一人称主語+係助詞一連体形」が係助詞ヤに集中して現れる特徴的なタイプであることがわかる。自分自身の心の状態・在り様などを対象とするこのような諸例には、総じて疑問文としての意は希薄で、諸注釈書類でも(14)「年老いた自分だが、今ごろになって新たな恋にあったものだなあ。」(大系)、(15)「大丈夫と思っていた私も、今は男らしい強い心もないことだ。」(大系)など詠嘆表現として口訳される。ヤが自明的な自らの心の状態や在り様に対する意外性や驚きなどを表す点で、意味的には(13)「おれはまあ安見兒を得たぞ。」(『萬葉集釋注一』伊藤博、1998年、集英社)などと口訳されるヤの例に極めて近い性格を有する。主語を承ける係助詞ヤの一人称主語への偏在は、係助詞カには見られないヤに特徴的な事実であることから、間投助詞に由来するヤ独自の特性¹³が表現形式の上に顕在化したものと推察される。間投助詞ヤに根差すこのような特性は、一人称主語以外の人名詞にヤが下接する例にも同様に認め得る。

(18) はしけやし妻も子どもも高々に待つらむ君也^ヤ山隠れぬる (奴流) (巻15、3692番、葛井子老)

(18)は二人称主語にヤが下接する例である。「君が山に隠れたこと(君が死んだこと)」は否定しようのない眼前の事実であるため、この例は一般に「～君はどうしてこの島にかくれてしまったのか」のように、理由を問う疑問詞を補うような口訳が施される。このような解釈は、上代に既に疑問形式として定着していた「ヤ一連体形」による他例からの類推が働いてのものと思われるが、(14)～(17)などと同様、ヤは「君・山隠れぬる」という自明の事実に対する詠者の深い嘆息と「君」に持ち掛ける(呼び掛ける)ような氣息とを併せもつ表現と解すべきであろう。一人称主語に下接する例は、その自明性から口訳で疑問性は裏面に退くが、二人称主語に下接する例ではとりわけそれが前面に出やすく、あたかも当該事態を招いた理由を聞き手である「君」に問う要説明疑問の如くに解される。このような例も、顕在しない疑問詞の存在を想定する必要性はなく、ヤは間投助詞性を色濃く留めつつ、係り受け関係を自覚的に表現する係り結び文へと展開した例と解するのがよいように思われる。

2-1-3 (C) 「～ヤ～助詞」

文末を助詞で結ぶC型は次の3例が見える。

(19) 神さぶといなにはあらず はた^ヤ也はたかくして後にさぶしけむ^{カモ}可聞 (巻4、762番、紀女郎)

(20) 瘦す瘦すも生けらばあらむを はた^ヤ也はた鰻を捕ると川に流る^ナ勿 (巻16、3854番、大伴家持)

(21) 円方の湊の渚鳥波立て^ヤ也 妻呼び立てて辺に近付く^モ毛 (巻7、1162番)

(19)(20)はヤが副詞「はた」を、(21)は動詞の已然形「立て」をそれぞれ受け、文末を助詞「かも」「な」「も」などで結ぶ。(19)(20)の「はたやはた」は「はたや」に「はた」を重ねて意味を強めた表現(『古語大辞典』小学館、「はたや」の項)で、このような副詞は、文法的にも意味的にも下文へと係っていくが、文末を助詞で結ぶためこれを間投助詞に含めるものも多い¹⁴。

先述のように、集中に最も多くの使用数を数える「連用修飾語+ヤー連体形」は本来的にヤの構文領域と推察されるが、次のような「副詞+ヤー連体形」の例などは、異型から常態の係り結びへの展開過程を跡付ける例と見做される。

(22) み吉野の山のあらしの寒けくにはた^ヤ也今夜も我がひとり寝む(牟) (巻1、74番)

上は「はたヤ～む」の形式をとる例であるが、一般に常態の係り結びとされるこのような例が、(19)(20)の如き諸例から展開したものであることは明らかであろう。

(21)は「条件句+ヤ～助詞」の句型による例である。「円方の湊の渚鳥」が「妻呼び立てて辺に近付く」原因や動機を「波が立つ」からかと疑う疑問条件法と解される。条件句を承ける係助詞ヤは集中に47例ほど観察されるが、異型はこれが唯一例であり、集中的に異型が現れる「主語+ヤー」「連用修飾語+ヤー」とは異なった様相を示す¹⁵。条件句を承けるヤは、文末に位置する例が集中に193例観察されるが、このうち8割強が「一已然形+ヤ」の形式をとる。(21)のような前後二件の形式的・意義的独立性が高い句型は、このような文末用法と文中用法(「已然形+ヤー連体形」との連絡を示唆する例とも見える)。

3 係りの重複

一文中に係助詞の付く異なる成分が2つ以上現れ、それらが同一の述語に係っていく句型を「係りの重複」と呼ぶことにする¹⁶。

(23) …あしひきの 山鳥こそば 峰向かひに 妻問ひすと いへ うつせみの 人なる我哉^ヤ なにす^カと可 一日一夜も 離り居て 嘆き恋ふらむ(良武) … (巻8、1629番、大伴家持)

(24) 世の中を憂しと思ひて家出せし我哉^ヤ何に^カ加かへりてならむ(将成) (巻13、3265番)

(25) 大君の 命恐み あしひきの 山野障らず 天離る 鄙も治むる ますらを^ヤ夜 なに^カ可物思ふ(母能毛布) … (巻17、3973番、大伴池主)

これらの例は、ヤを含む成分「～我や」「～ますらをや」以外に、一文中に係助詞を伴う別の係り成分「なにすとか」「何にか」「なにか」などが存在し、これら二つの係り成分が同一の述語に係っていくという特殊な文型をなしている。「～ヤ～カー連体形」の如き句型とも見えるこれらは、いずれも疑問詞疑問文の諸例で、構造的には〈特殊な結び〉のA型に酷似している。即ち、〈特殊な結び〉のA型が、呼び掛けの性格を帯びた「人名詞+ヤ」に疑問詞が後続する「人名詞+ヤ、疑問詞」と把握されるのに対し、これは疑問詞疑問文が後続する「〔人名詞+ヤ〕+〔疑問詞+カー連体形〕」の如き句型と捉えられる。このような諸例のヤは、未だ完全には係助詞化を遂げておらず、間投助詞的な性格を色濃く留めるが、(14)～(17)のような「主語+ヤ—連体形」との間に明らかなる連続性が認められる。

集中には狭義の係助詞（ぞ・なむ・や・か・こそ）の付く成分が一文中に2つ以上現れ、それらが同一の述語に係っていく〈～係助詞～係助詞～連体形〉の如き句型による例が10例ほど見える。それらの係り成分の組み合わせと用例数は次の通りである。

- ・～ヤ～ヤ—連体形。(4例)
- ・～ヤ～カー—連体形。(3例)
- ・～ヤ～ゾ—連体形。(2例)
- ・～カ～ゾ—連体形。(1例)

10例中9例までは係り成分の1つ以上にヤを含む例であり、他はカと確定系の係助詞ゾとの組み合わせによる1例が見えるのみである¹⁷。助詞ヤはコソ・ゾ・カなどの他の係助詞に比べ、一文中に複数回現れやすい助詞であることが確認される。次のような例では、一つの連体形述語に対しヤの付く成分が4つも現れる。

(26) …古ささきし我^ヤ哉 はしき^ヤ八し 今日^ヤ八^モ方^モ見^ヤらに いさにと^ヤ哉 思はえてある(在) … (巻16、3791番)

4つの係り成分のうち、感動詞化した「はしきやし」を除き、「我ヤ」「今日ヤモ」「～とヤ」などにはいずれも同係り成分をもつ常態の係り結びの例が観察され、異型から常態への連続性に示唆的である。

(27) 国遠き道の長手をおほほしく今日^ヤ夜^モ過^ヤぎ^ヤなむ(南)言問ひもなく(巻5、884番、麻田陽春)

(28) …うちひさす 宮女 さすたけの 舍人壮士も 忍ぶらひ かへらひ見つつ 誰が子そと^ヤ哉 思はえてある(在) … (巻16、3791番)

〈係りの重複〉は、この他「連用修飾語+ヤ—」の構文による次のような例も観察される。

(29) かくして^ヤ哉^ヤなほ^ヤ八^ヤ退^ヤらむ(将) 近からぬ道の間をなづみ参る来て(巻4、700番、大伴家持)

(30) かくして^ヤ也^ヤなほ^ヤ哉^ヤ老^ヤいなむ(将) み雪降る大荒木野の篠にあらなくに(巻7、1349番)

(31) かくして哉^ヤなほ八^ヤなりなむ(牛鳴) 大荒木の浮田の社の標にあらなくに(巻11、2839番)
 これらの諸例については、ヤの付く2つの成分のうち一方を係助詞、他方を間投助詞と説く注釈書類も見えるが、それらの間でもどちらを係助詞、乃至間投助詞と見做すかは必ずしも一致していない。実際、常態の係り結びには、次のように「かく(のみ)ヤー連体形」「なほヤー連体形」双方の構文形式が存在し、いずれの係り成分も常態の係り結びへと展開していく可能性を孕んでいる。

(32) 山川のそきへを遠みはしきよし妹を相見ずかく夜^ヤ嘆かむ(牟)(巻17、3964番、大伴家持)

(33) …かくのみ也 息づき居らむ かくのみ也 恋ひつつあらむ(牟)…(巻8、1520番、山上憶良)

(34) …我^ワ皇^ガ太^ス上^メ天^ミ皇^ホ大^キ前^ス尔^コ恐^ト古^ノ土^ホ物^マ進^ハ退^ヒ葡^モ匍^シ廻^マ保^ヒ理^ハ白^ハ賜^マ比^ヒ受^ケ被^タ賜^マ久^ク者^ハ卿^ノ等^ト乃^ハ問^ヒ来^リ政^ヲ乎^カ者^ハ
 加^カ久^ク耶^ヤ答^カ賜^マ加^カ久^ク耶^ヤ答^カ賜^マ止^シ白^ハ賜^マ…(宣命第6詔天平元年八月癸亥、聖武天皇)

(35) 愛しと我が思ふ心早川の塞きに塞くともなほ哉^ヤ崩えなむ(将)(巻4、687番、大伴坂上郎女)

(36) 波高しいかに梶取水鳥の浮き寝也すべきなほ哉^ヤ漕ぐべき(応為)(巻7、1235番)

〈係りの重複〉の助詞ヤへの局限的な在り様は、他の係助詞にはないヤの間投助詞性が形式の上で反映したものと見えるが、同時にそれらの諸例は、ヤが間投助詞から係助詞へと展開していく過渡的な姿を留める諸例でもある。

4 まとめ

以上、上代語にみるヤによる係り結びの異型を整理し、間投助詞及び常態の係り結びとの連関について考察を加えた。明らかとなった点をまとめれば、次のようである。

万葉集にはヤによる係り結びの異型が係助詞ヤ全体の7%ほど見える。そのバリエーションは、文末を連体形以外の形態で結ぶ〈特殊な結び〉と、一つの結びに対し複数の係り成分が存在する〈係りの重複〉に大別される。これらの異型が現れる構文環境は「主語+ヤー」「連用修飾語+ヤー」に局限しており、この2構文は、異型のみならず常態の係り結びにおいても突出した使用例・使用率を示し、同構文のカの使用数・使用率をも大きく上回ることから、本来的にヤが位置する場所(ヤによる係り結びの出発点となる場所)であったと考えられる。

ヤによる係り結びの異型は、「体言+間投助詞ヤ」「連用修飾語+間投助詞ヤ」との連続性が顕著であるが、〈特殊な結び〉は文末を疑問詞・助詞・終止形で結ぶ点で、〈係りの重複〉は複数の係り成分をもつ点で、完全には係り結び化を遂げておらず、ヤは未だ間投助詞性を色濃く残す。これらは、下文からの文法的遊離性が比較的強い「体言+間投助詞ヤ」「連用修飾語+間投助詞ヤ」が、下文との関係性を強め、係り受けの関係を自覚的に表現する係り結び構文(一つのまとまりをなす

連体形終止文)へと展開していく過渡的な姿を留める例群と考えられる。ヤに代表的な「主語+ヤ一連体形」「連用修飾語+ヤ一連体形」は、このような諸例の延長線上に成立した構文と見做されるが、これらは上代においてヤがカの領域へと使用範囲を拡大し、「ヤ一連体形」が疑問文の一形式として定着していく前段階の様相、即ちヤによる係り結び成立の初期段階の様相をも示していると考えられる。

〈注〉

- 1 例えば『古今和歌集』では、常態から外れた句型は「ヤ+疑問詞」の5例が確認できるのみで、疑問詞を伴わない例では完全に姿を消す。
- 2 調査には『萬葉集』（小学館日本古典文学全集）、及び『萬葉集索引』（塙書房）を用いた。その他『続日本紀宣命 校本・総索引』（吉川弘文館）『古事記歌謡』『日本書紀歌謡』『風土記歌謡』『仏足石歌』（以上、岩波日本古典文学大系。通読による）の字音表記例も併せて観察しているが、用例数が僅少であるため、用例数には含めず、参考として適宜用例を掲げた。資料名の記載がないものは全て『萬葉集』からの引用例である。なお、引用に際しては私に表記を改めたところもある。
- 3 『研究資料日本文法⑦助辞編（三）助詞・助動詞辞典』（1985年、明治書院、「や（係助詞）」の項）の「文中にあって〈係り〉となり、文末の活用語を連体形で結ぶ。」などの記述を参考にした。
- 4 例えば、川端（1994）は文末を連体形以外の形態で結ぶこのような諸例を〈特殊な結び〉をもつ「体言系の係結」とする。
- 5 大野（1993）、266頁。
- 6 梅原恭則（1989）、325頁。
- 7 酒井（1970）。
- 8 桜井（1967）。
- 9 集中には「もや」が終助詞として文末に現れる例も1例確認される。
白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見ても^も母^や也（巻20、4415番、物部歳徳）
- 10 『古語大辞典』（小学館、「もや」の項）には「《係助詞「も」+係助詞「や」。連体形で結ぶ。中古以降の用法》疑問の意を表す。」とある。
- 11 「連用修飾語+カー一連体形」は30例（疑問詞を伴わないカによる常態の係り結びの約12%）、「主語+カー一連体形」は25例（約10%）。
- 12 係助詞カが承ける主語の内訳については、堀尾（2012）を参照されたい。
- 13 例えば、此島（1973）は「ひとりみずから詠嘆する意が強」（422頁）とし、酒井（1970）にも「よ」に比べ「自己志向型でひとりごとの詠嘆の度が強」とある。
- 14 『日本書紀歌謡』にも文末を助詞で結ぶ次のような例が見えるが、やはりヤは副詞に下接している。
君が目の 恋しきからに 泊てて居て かく^も野恋ひむ^も謀 君が目を欲り（日本書紀歌謡、123番）
- 15 集中にはヤによる係り結びの異型が19見えるが、このうち18例までが「主語+ヤ一」「連用修飾語+ヤ

一」の構文による。

- 16 係助詞の付く二つの同一成分が同一の述語に係る次のような選択疑問の例は、異型とは見做さない。

…天地は 広しといへど 我がためには 狭くやなりぬる 日月は 明しといへど 我がためには 照り
や給はぬ 人皆可^か 我のみ也^か然^る… (巻5、892番、山上憶良)

- 17 次はカとゾとの組み合わせによる例である。

…今更に 君か我を呼ぶ たらちねの 母の命歟^か 百足らず 八十の衢に 夕占にも 占にも曾^も問^ふ
(問) 死ぬべき我がゆゑ (巻16、3811番、車持娘子)

これには「たらちねの 母の命か」の係り先を「～問ふ」とするもの（小学館日本古典文学全集など）と、「たらちねの 母の命か」で切れて、これを上の「今更に君か我を呼ぶ」と対をなすとするもの（『萬葉集釋注八』伊藤博、1998年、集英社）がある。仮に後者の解釈に従えば選択疑問となり〈係りの重複〉からは除外される。

〈参考文献〉

- 梅原恭則（1989）『講座日本語と日本語教育4』「助詞の構文的機能」明治書院
大野晋（1993）『係り結びの研究』岩波書店
川端善明（1994）「係結の形式」『国語学』第176集
此島正年（1973）『国語助詞の研究 助詞史素描』おうふう
佐久間鼎（1959）『日本語の言語理論的研究』恒星社厚生閣
酒井憲二（1970）『国文学解釈と鑑賞』第35巻13号、「間投助詞 や・を・ゑ・よ」、至文堂
桜井光昭（1967）『国文学解釈と教材の研究』第12巻第2号、「間投助詞 や」、学灯社
佐伯梅友（1958）「間投助詞一を・や一」『国文学 解釈と鑑賞』第23巻第4号、至文堂
野村剛史（2001）「やによる係り結びの展開」『国語国文』第70巻1号
堀尾香代子（2012）「上代語における係助詞カの振る舞い—係助詞ヤとの比較を通して—」『北九州市立大学文学部紀要』第81号
山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF HUMANITIES
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
No. 82 March 2013

CONTENTS

The Irregularity of “Kakarimusubi” include “Ya”

Kayoko HORIO17

The Department of Comparative Culture
The Faculty of Humanities
The University of Kitakyushu
2013